

「あまみエフエム ディ！ウェイヴ」放送原稿〈8月8日（金）放送分〉

テーマ「奄美の民話や昔話」

あまみエフエム ディ！ウェイヴをお聞きの皆様、おはようございます。鹿児島県立奄美図書館です。今日は、毎月第2金曜日にお届けする、「奄美の民話や昔話」シリーズの第5回、沖永良部島の昔話「大^{おおとし}歳の客」です。

昔、東の年配^{ねんばいしや}者はお金持ちの大家^{おおや}で、西の年配者は貧しい年寄り夫婦でした。年寄り夫婦は二人暮らしで、子どももおらずお金もありませんでした。

ある年の十二月二十九日の夜のことでした。西の年配者のお爺^{じい}さんが、「東の年配者の家に行って、米や味噌^{みそ}を借りて年越しをしよう。」と言いました。するとお婆^{ばあ}さんが「東の年配者の家に行って、食べ物^{あわ}を借りようとしても貸してはくれないでしょう。それよりも粟^{あわ}を使ってお粥^{かゆ}でも炊^たいて、年越しをしましょう。」と答えました。

ちょうど年寄り夫婦がそう話しているとき、天の神様が人間の心を見るために地上に降りてきました。

神様は貧しい飯^{めし}貰^{もら}い坊主^{ぼうず}の姿になり、まず初めに東の年配者の家を訪れました。神様は「誠に済まないことであるが、行く先がないから宿を貸してくれ。」と言いました。東の年配者は「師走^{しわす}の二十九日の歳の夜を知らないのか。ぐずぐず言うとお前の骨を打ち折ってしまうぞ。」と答えました。神様は「それなら、よろしい…。」と言って、東の年配者の家をあとにしました。

次に神様は西の年配者の家を訪れました。神様は「お爺さん、お婆さん、私は飯貰い坊主であるが、今日の歳の夜に宿を貸してください。」とお願いしました。するとお爺さんとお婆さんは「さあさあ、早くお入りなさい。食べる物は何もありませんが、粟の種を入れたお湯がありますから、それでもお上がりなさい。」と言いました。

お爺さんとお婆さんが坊主^{まね}を家に招き入れると、坊主は「一^{いつしやうなべ}升鍋を洗って、青葉を三枚入れ、鍋に水をいっぱいにして炊いてごらん。」と言いました。お婆さんが坊主に言われるとおりにすると、不思議なことにたくさんの種類のおかずができました。次に坊主は「今度は羽釜^{はがま}を洗ってごらん。」と言いました。お婆さんが羽釜を洗うと、坊主は財布から米粒を三つ取り出して羽釜の中に入れ、「さあ、これを炊きなさい。」と言いました。坊主の言うとおりに釜を炊くと、釜いっぱいのご飯ができました。そのあと三人は、いろいろなご馳走^{ちそう}を食べて楽しく年越しをすることができました。

ご馳走が終わると坊主は、「お爺さんお婆さんは、貧乏をして歳もとっているが、宝^{たからもの}物^{もの}を得るのがよいか、それとも昔の若さ^{たす}を得るのがよいか。」と尋ねました。お爺さんとお婆さんは「私たちは昔の…、十七、八歳頃の若さが欲しいです。」と答えました。

すると坊主は「それならば大きな鍋にお湯を沸^わかしなさい。」と言いました。鍋にお湯が沸くと、坊主は財布から黄色い粉をつまんでお湯の中に入れました。そし

て坊主は「お爺さんお婆さん、前後^{ぜんご}しないように二人一^{いつしよ}緒に湯の中に入りなさい。」と言いました。お爺さんお婆さんが二人同時にお湯に入ると、何と二人は十七、八歳の若者と娘になりました。

やがて夜が明けました。坊主は「鍋の火に水をかけて消し、お婆さんは東の年配者の家に行って、火をもらってきなさい。」と言いました。お婆さんが東の年配者の家に火をもらいに行くと、家^{いえ}中^{じゆう}のみんながその若返った姿を見て驚きました。若返ったお婆さんが「実は…昨晚、家に飯^い貰^えいの坊主が来て…。」と事の次第^{しだい}を語ると、東の年配者は「ああ、私はとんでもないことをしたものだ…。あの坊主をうちに泊めていれば、我々がこのような幸運を授かったものを…。今からでも何とかすれば、この家に来てくれないだろうか。西の婆さん、あの坊主にそう頼んではくれないか。」と言いました。

お婆さんが家に帰ってそのように話すと、坊主はすぐに東の年配者の家へ行き、「どうしてじゃ、東の年配者。お前はこれほどの財産を持っている。もう何の不足もないではないか。」と言いました。東の年配者は「財産があるからこそ、さらに欲しいのです。もっとくださいませ。」と答えました。「それならばお金は不足ないだろうから、昔の若さに戻してあげよう。」と坊主は言って風呂を沸かせて、今度は財布から赤い粉をつまんで入れました。坊主が「さあ、みんな一^{いつせい}斉にお湯を浴びなさい。」と言うと、家中のみんなが一度にお湯を浴びました。

ところがどうでしょう。何と年配者夫婦は猿に、その子どもは犬に、使用人の三人は猫と^{ねずみ}鼠と^{やぎ}山羊になってしまいました。

そして坊主は西の家の夫婦に、東の年配者の家や財産を持たせることにしました。夫婦は坊主の言うとおりに、東の年配者の家に住むことにしました。ところが、それからというもの、夕方になるといつも二匹の猿が家にやって来て、暴れては夫婦を困らせるのでした。とてもこんな家には住めないから、元の家に帰ろうと夫婦が話していると、またあのときの坊主がやって来ました。

夫婦が猿の話をすると、「庭にある黒い石を二つ焼いて、いつも猿が来る所に置きなさい。」と坊主は言いました。夫婦がそのとおりにすると、二匹の猿がやって来^{やけど}ました。猿はその焼けた石に気付かずに腰をかけたので、火傷をして、それっきり二度と家に来なくなりました。

猿が来なくなったので、若返ったお爺さんとお婆さんは東の年配者の家でいつまでも幸せに暮らしました。そして猿のお尻が赤いのは、その時焼かれたからだという話です。

さて今回のお話はいかがでしたか。この「大歳の客」というお話は全国に広まっていて、その地方ごとのいろいろな種類があるようです。今回は沖永良部島の昔話として取り上げましたが、同じ奄美でもいろいろな種類の話が伝わっています。

このように奄美図書館には、郷土に伝わる昔話を紹介した本がたくさんあります。ぜひ図書館にいらして、いろいろな本を手にとってほしいと思います。職員一同、皆様のご来館を心よりお待ちしております。以上、鹿児島県立奄美図書館でした。